

## 講演

### 継承の課題：何が継承できるのか、何を継承するのか

川野 徳幸

広島大学平和科学研究センター長・教授

ご紹介いただきまして、ありがとうございます。広島大学平和科学研究センターのセンター長を務めております川野でございます。

皆さん、本日はご多忙の中、そして、お暑い中、お集まりいただきましてありがとうございます。漏れ聞くところによると、これ以外の会場でも幾つかの重要なシンポジウム、あるいは研究会等々が開催されているようです。そういった中で、このシンポジウムに足をお運びいただきまして、あらためて御礼申し上げます。

私の話に入る前に、本日のシンポジウム「原爆体験・戦争記憶の継承～託す平和遺産」について、全体の概要、そして狙いについてお話をしたいと思います。

それをまとめたものが、次のスライドです。

#### シンポの概要・ねらい

- ・何を継承するのか、できるのか
- ・原爆体験とは何か(そもそも原爆被爆被害とは何か)
- ・継承のために、行政、資料館、大学は何ができるのか
- ・どういった具体的取り組みがあるのか
- ・どういった分析手法があるのか
- ・如何に「正しい」記憶を記録し、伝えるのか
- ・沖縄の記憶とは何か。終わらない沖縄の記憶。ヒロシマと異なる記憶の起点・背景
- ・戦争記憶におけるメディアの影響
- ・継承の課題を検証、継承のあり方を考える



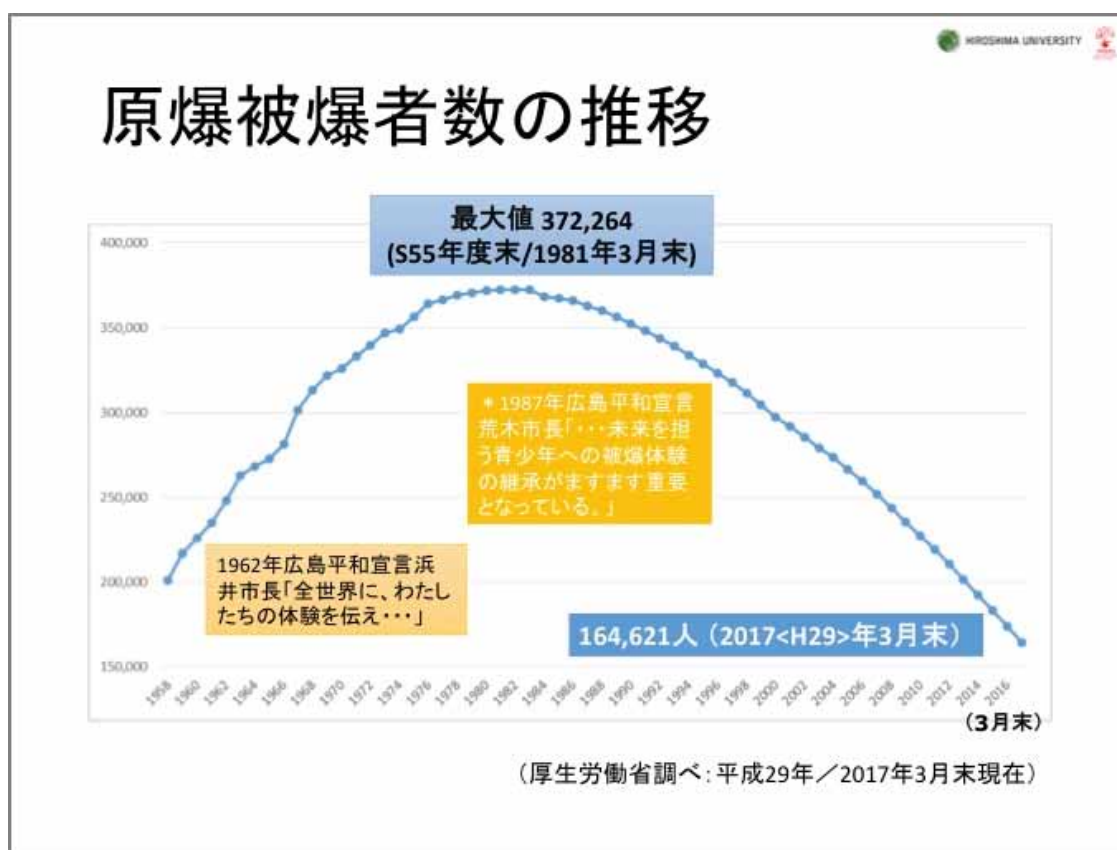
今日のシンポジウムでは、「何を継承するのか、できるのか」と非常に大きな題目を立てているわけですが、そもそも被爆体験とは何なのか、原爆被害とは何なのか、をまず考えたいと思います。次に、被爆体験継承のために行政、資料館、大学は何ができるのか。具体的にどういった取り組みが可能なのか。また、研究という視点で考えれば、どういった分析手法があり得るのか。さらに、どのように「正しい」記憶を記録して伝えるのか、こういったテーマでシンポジウムを構成しています。

志賀賢治館長には、「記憶の継承」と題し、平和記念資料館の取り組みをお話しいたできます。グレン・フック先生には、広島・長崎だけではなく、沖縄の地上戦の記憶をどのようにわれわれは記録して、記憶して伝えていくのか、広島・長崎との異同を交え、お話しいただきます。さらには、アンドリュー・ホスキンス先生には、戦争を記憶することにおけるメディアの役割、あるいは影響についてお話しいただきます。また、ファン・デル・ドゥース瑠璃先生には、被爆証言を分析するための一つの手法をご紹介します。

最後には、パネルディスカッションの時間を設けたいと思います。このパネルディスカッションでは、本日まで講演いただきました先生方、そして、本日まで参集いただきましたフロアの皆さま方と継承の課題をいま一度検証し、継承の在り方、可能性を考えるシンポジウムにしたいと思っております。積極的なご参加を是非よろしくお願いいたします。

ここから私の話に入ります。そもそも継承、継承と言いながら、私たちは、いつ頃からこの継承の問題、あるいは継承の重要性を議論してきたのでしょうか。平和宣言を確認する

と、2017年までで、過去10回「継承」という単語が使われています。被爆体験継承については、1976年荒木武市長が、はじめて言及しています。それ以降、特に1980年代の終わり頃から継続的に被爆体験継承の重要性が語られているようです。その背景にあるのは、あらためてここで指摘するまでもなく、原爆被爆者数の減少があります。次のスライドに示すように、昭和55年（1980年）にピークを迎えた原爆被爆者は、その後、減少に転じ、先の発表では、16万4,000人にまで減っています。



また、次のスライドは、現在の原爆被爆者数内訳を示したものです。先ほど少しお話しいたしましたように、「平和宣言」を見ると、「継承」という言葉が使われたのは過去10回ございます。一番最初に使ったの

は、荒木武市長で、1976年に被爆体験継承の重要性を指摘しました。それ以降、1983年、1987年、1988年の平和宣言で同様の指摘をしています。2000年には、秋葉忠利市長が被爆体験継承の重要性を指摘してい

ます。また、平岡敬市長は、「語り継ぐ」といった用語を使って、「次代を担う若い世代に原爆や戦争の悲惨さを語り継いでいきたい」といった指摘をしております。

ってよいかもしれません。もちろん、平和宣言から見る限りにおいてですが。

ここで、被爆体験継承の難しさとは何かということであらためて考えてみました。非常に簡単な図ではございますが、それを示したものが次のスライドです。第一世代というのは原爆被爆の体験者である被爆者です。第一世代が第二世代に伝えていく過程で、当然、失われる記憶というのがあります。第一世代は伝え、第二世代、第三世代は何をするのかというと、端的に言ってしまえば、それを理解することに尽きるわけです。

### 現在の原爆被爆者数内訳

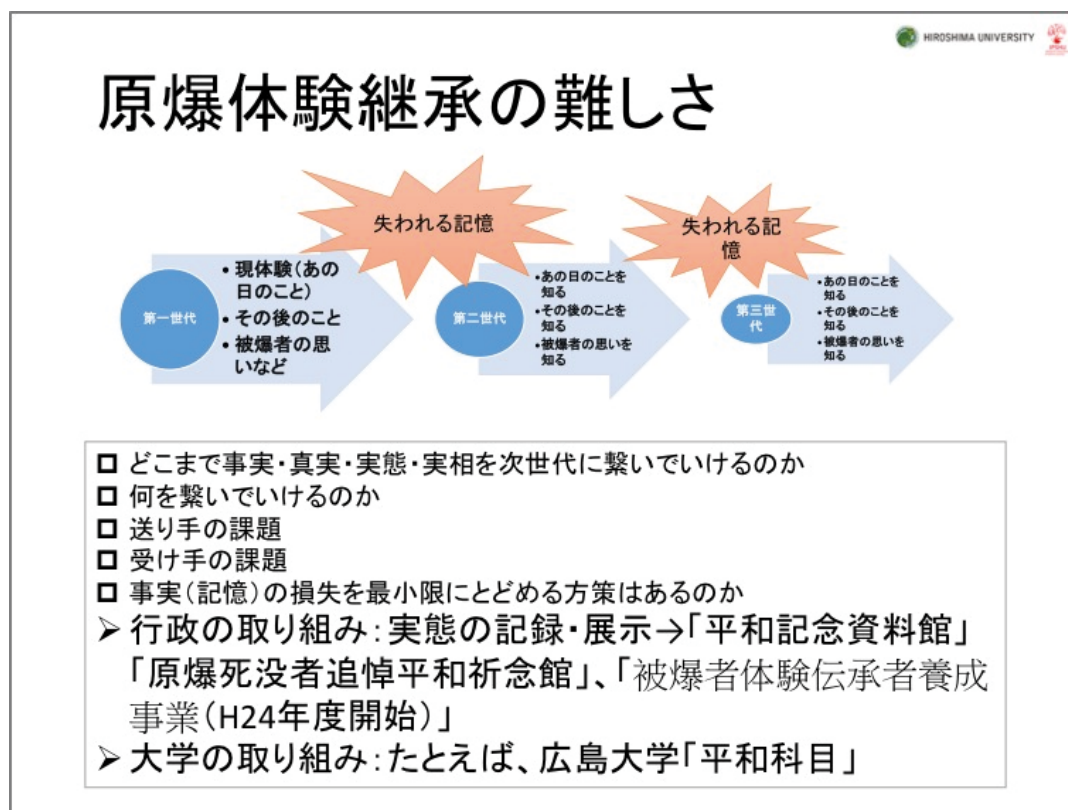
| 被爆者別  | 人数      | 全体に占める割合 | 都道府県市 | 人数     | 全体に占める割合 | 順位 |
|-------|---------|----------|-------|--------|----------|----|
| 1号被爆者 | 102,346 | 62.2%    | 広島市   | 53,340 | 32.4%    | 1  |
| 2号被爆者 | 36,962  | 22.5%    | 長崎市   | 30,813 | 18.7%    | 2  |
| 3号被爆者 | 18,158  | 11.0%    | 広島県   | 21,286 | 12.9%    | 3  |
| 4号被爆者 | 7,155   | 4.3%     | 長崎県   | 12,157 | 7.4%     | 4  |
| 合計    | 164,621 | 100.0%   | 福岡県   | 6,395  | 3.9%     | 5  |
|       |         |          | 東京都   | 5,487  | 3.3%     | 6  |
|       |         |          | 大阪府   | 5,382  | 3.3%     | 7  |
|       |         |          | 神奈川県  | 4,047  | 2.5%     | 8  |
|       |         |          | 兵庫県   | 3,383  | 2.1%     | 9  |
|       |         |          | 山口県   | 2,809  | 1.7%     | 10 |

前年度から9,459名が死没  
平均年齢: 81.41才

※広島市、長崎市の人数は県の人数に含まない。  
※順位はここ数年ほとんど変わらず

(厚生労働省調べ: 平成29年/2017年3月末現在)

行政においては、1980年代から、被爆体験継承の重要性が深く認識され始めたとい



また、私は、8/6・8/9の地獄のような原爆体験である「あの日のこと」、原爆放射線に

起因する原爆後障害である「その後のこと」、そして被爆者の思い、というこの三つを原

爆体験の大きな柱だと考えています。それらを簡単に図式化したものがこのスライドです。

では、どこまで事実・真実・実態・実相を次世代につないでいけるのか。そのときに何をつないでいくのか。「送り手」である被爆者の課題とは何か。われわれ「受け手」の課題とは何か。こういった問題が、継承の難しさの根底にあります。送り手の課題については、本日は特に議論いたしません。といいますか、とにかく伝えていただくという作業をお願いするしかないわけです。今日は受け手の課題を中心に話をしたいと思います。

事実あるいは記憶の損失を最小限にとどめる方策とはどんなことが考えられるのか。具体的に、行政の取り組みはどんなものがあるのか。実態の記録・展示、これに関しては、後ほど志賀館長に広島平和記念資料館の取り組みなどご紹介いただけるものと思います。それ以外に、広島原爆死没者追悼平和祈念館の被爆証言収集事業、広島市が現在取り組んでいる被爆者体験伝承者養成事業等々、何れも具体的な取り組みの例として挙げられます。そして、私の方から最後にお話いたしますが、所属の広島大学の取り組みについて、お話しさせていただきます。

さて、次のスライドは、2012年読売新聞実施のアンケート調査結果からの引用です。語り部の方々131名に「継承のために何が必要か」と聞いているのですが、このような結果になっています。「継承者を育成する」が最も多いわけですが、その担い手は、行政とか大学になるわけです。「教育現場で体系的に教える」、これはまさにわれわれ大学が担うべきことです。「被爆地以外でも証言

活動を広げる」という回答も多いわけですが、この担い手は被爆者自身ということになります。

継承のために何が必要か  
(2012年読売・広大語り部調査)

| 回答(複数回答)        | 人数(131人中)   |
|-----------------|-------------|
| 継承者を育成する        | 80 → 行政、大学  |
| 教育現場で体系的に教える    | 70 → 学校、大学  |
| 被爆地以外でも証言活動を広げる | 70 → 被爆者    |
| 映像や音声を残す        | 68 → 被爆者、行政 |
| 手記の執筆、配布        | 59 → 被爆者、行政 |

さて、その被爆者は、継承についてどう考えているのでしょうか。次のスライドは、2015年と2010年に読売新聞と平和科学研究センターが共同で実施した被爆者意識調査の結果です。

原爆被爆者は継承についてどう考えているのか(1)

- 2015年読売・広大被爆者意識調査(回答者1943人):「被爆体験が十分に継承されているか」→「はい」13%、「いいえ」51%、「わからない」31%
- 2010年同調査(回答者1015人)では、「体験が引き継がれると思うか」→「そう思う」61%
- 被爆者の多くは期待通りに継承されていないと感じている

これは私には、かなりショックな数字でした。2010年調査の「体験が引き継がれると思うのか」という問いに対しては、「そう思う」が61%でした。しかし、2015年調査で「被爆体験は十分に継承されているか」と問いに対して、「いいえ」が51%でした。つまり被爆者の多くは、どうも期待

通りに継承されていないと感じています。

次のスライドは、朝日新聞アンケート調査結果です。約半数の回答者が「伝わっていない」と感じています。その理由は幾つか挙げられているわけですが、端的に言ってしまえば、「実相を伝えきれないという思い」につきます。これは後ほど被爆者の方々から、もしご意見を頂けるのであれば、ありがたいのですが、実相を伝えきれないという思いが、やはり伝えるということを阻んでいるという理由の一つのような気がします。

### 被爆者は継承についてどう考えているのか(2)

| 設問:「被爆体験は次世代に伝わっていると思うか」 | 2005年朝日新聞・広大・長大被爆調査(回答者13204人) | 2015年朝日新聞調査(回答者5762人) |
|--------------------------|--------------------------------|-----------------------|
| 十分伝わっている                 | 4%                             | 2%                    |
| ある程度伝わっている               | 45%                            | 36%                   |
| <b>あまり伝わっていない</b>        | <b>38%</b>                     | <b>47%</b>            |
| まったく伝わっていない              | 3%                             | 4%                    |
| わからない                    | 5%                             | 5%                    |

10年前より、伝わっていないと感じる回答者が増加。**約半数の回答者が伝わっていないと感じている。**「その惨状は人間の想像力や表現能力を超えた非人間的なもの」(2005年調査)  
→**実相を伝えきれないという思い**

なぜ伝えないのかということをもう少し考えてみましょう。次のスライドは2015年の朝日新聞、そして読売新聞の回答結果です。「体験があいまいで思い出せない」というのは、当然、時間の経過とともにあるわけですが、それ以外では「体験を理解してもらえと思えない」、「つらく思い出したくない」、「尋ねられたことがない」です。やはり「つらい」、「思い出したくない」、「理解してもらえと思えない」といった気持ちが、被爆者の方々には根強く残っているということも、このアンケートでは示されています。

### なぜ、伝えないのか

| なぜ、伝えないのか             |     | なぜ、子どもに伝えていないのか       |     |
|-----------------------|-----|-----------------------|-----|
| 2015年朝日新聞調査(回答者5762人) |     | 2015年読売新聞調査(回答者1943人) |     |
| 体験があいまいで思い出せない        | 20% | 尋ねられたことがない            | 55% |
| つらく思い出したくない           | 21% | つらく、思い出したくない          | 39% |
| 被爆体験を理解してもらえと思えない     | 19% | 離れて暮らし、話す機会が少ない       | 38% |
| 話す機会がなかった             | 20% | 理解してもらえと思えない          | 37% |
| 差別や偏見にさらされるのを恐れた      | 14% |                       |     |

**つらい、思い出したくない、理解してもらえと思えない**

さて、「原爆体験」とわれわれはよく口にするわけですが、では、原爆体験とは何かということをおさらいをしたいと思います。

次のスライドに示すように、私はこの三つが中心的な原爆体験の柱だと考えています。

### 原爆(被爆)体験とは何か

- あの日のこと**: 脳裏から離れない地獄園
- その後のこと**: 原爆後障害、それを起因とする健康不安、社会的差別など
- 原爆被爆者の思い・願い**
  - ・「核なき世界」への願い、思い
  - ・反戦への願い、思い など
- 原爆被爆者の複雑な思い**
  - ・原爆投下に対する恨み、つらみ
  - ・原爆投下に対する責任論 など

1 番目「あの日のこと」です。あの日のことというのは、当然、脳裏から離れない、あの被爆直後の地獄のような情景です。2 番目、原爆体験を構成する「その後のこと」です。その後のことというのは、原爆後障害と言われるものです。原爆放射線に起因する健康不安とか社会的差別なども含みます。3番目は「原爆被爆者の思い・願い」です。思いに関しては「核なき世界」への熱望、反戦への願い、こういったものがあ

ります。実はそればかりではなく、原爆被爆者には非常に複雑な思いもあるわけです。原爆投下に対する恨み、つらみとか、あるいは原爆投下に対する責任論とか、こういったものと共存しながら、それでも原爆被爆者の思いとしては「核なき世界」へ収斂されていきます。そういった複雑な思いもまた、被爆体験だと言えます。

「あの日のこと」、「その後のこと」、「原爆被爆者の思い・願い」という三つによって、原爆体験というのは、たぶん語られるべきだろうと私は考えております。

原爆被爆者の方々に聞いても、同様の回答を得ています。2015年朝日新聞調査において、何を次の世代に伝えたいのかという設問がありますが、やはり三つの柱を回答しています。次のスライドをご覧ください。

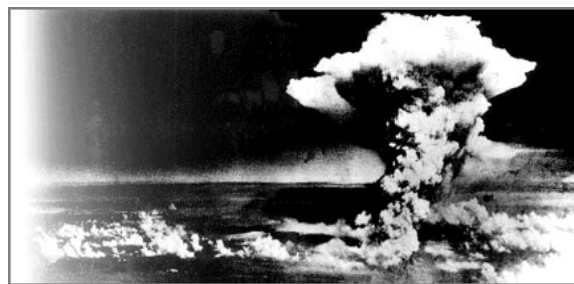
| 回答(複数回答) 回答者5762人 | 頻度            |
|-------------------|---------------|
| 原爆投下直後の悲惨さ        | 56% →「あの日のこと」 |
| 何十年も続く放射線障害の恐ろしさ  | 48% →「その後のこと」 |
| 平和の尊さ             | 55% →「願い・思い」  |
| 助け合うことの大切さ        | 16%           |
| 健康のありがたさ          | 32%           |
| 政治・軍を暴走させないこと     | 29%           |
| 何事もあきらめないこと       | 9%            |

1番目が「原爆投下直後の悲惨さ」です。いわゆる「あの日のこと」です。これが56%。「何十年も続く放射線障害の恐ろしさ」、これは「その後のこと」で48%です。最後に「平和の尊さ」が55%。被爆者の方々に聞いても、やはりこの三つに集約されるということです。少なくとも私たちは、この三つの領域の体験をどのように理解して、次の世代にバトンを渡していくのか、

われわれ自身も大きな課題を背負っているということになるわけです。少し、この三つの原爆体験を確認しておきましょう。

以下に原爆直後の写真をお見せいたします。

何れも、広島大学原爆放射線医科学研究所所蔵のAFIP返還資料です。



\*1945年8月6日、広島原爆投下の約1時間後。爆心地から約80kmの瀬戸内海上空より米軍撮影。(4時間後との説もある)



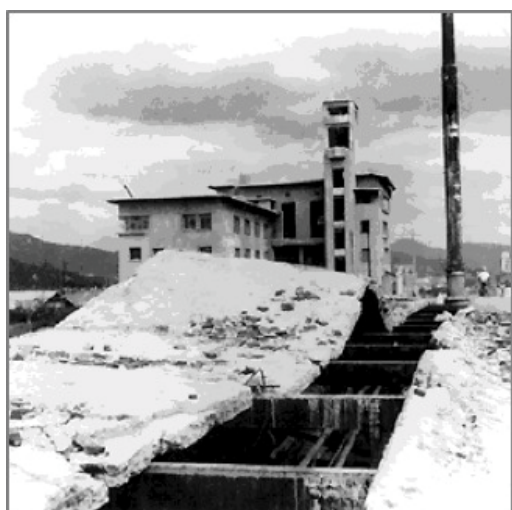
\*広島県産業奨励館（現原爆ドーム）1945年10-11月頃の撮影とされる。



\*被爆後の日赤広島病院1945年11月27日撮影



\*被爆後の八丁堀通り。福屋前から西を見る。中央は芸備銀行、住友銀行) 1945年11月23日撮影



\*爆風で吹き上げられた相生橋の歩道。爆心地から300m。1945年10月川本俊雄氏撮影

冒頭のきのこ雲の写真の下でおこった地獄図のような原風景が、その後の写真です。周知のように、たった一発の原子爆弾によって、爆心地から半径2キロは崩壊してしまいます。

原爆被爆者の記憶の核にあるものは、被爆当時の「あの日」の悲惨な光景です。被爆証言・手記の中で、被爆者は繰り返し、「地獄」、「生き地獄」、「筆舌に尽くしがたい」と表現します。そういった記憶の核にある、「あの日」の「筆舌に尽くしがたい」情景を夢に見、思いだしたりします。

1985年に日本被団協が実施したアンケート調査の中で、あの日のことを聞いています。その証言の中から「地獄」という単語を抜いて、ごく一部を抜粋したものが次の用例です。8,235名のうち568名が「地獄」という単語を使って、あの日の地獄を語っています。

「地獄」の用例

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今も夢に見る。／ 「原爆</li> <li>・ 残虐、無惨此のような阿鼻</li> <li>・ 涙かれ見渡すこの世の</li> <li>・ 程です。／ 一言でいうと</li> <li>・ の人達は全員死にました。</li> <li>・ 、水を求める姿、それは生</li> <li>・ な死んで行った。まさに生</li> <li>・ 。瓦れきの山。一瞬の中に</li> <li>・ 鼻叫喚の情景と化し、生き</li> <li>・ 泣き叫びさまよい、まるで</li> <li>・ さい時に絵本に出ていた「</li> </ul> | <p>地獄」忘れられるものなら忘れないが地獄が二度とあって、ほしくない。原地獄絵図／ 幽鬼と化せし人のさまよ地獄であった。／ 目も満足にあって地獄でした。／ 防空ごうより出た時地獄そのもので筆などで表わすことが地獄であった。／○原爆ドーム付近の地獄絵図となった広島市街。放射能の地獄の状況を呈した。このような行為地獄絵図でも見る如きものでした。し地獄の絵」そっくりの、頭毛を振り乱</p> |
|--|--|

私たちは、原爆投下直後の「あの日のこと」をどのように理解するのかということが、一つ目の大きな課題になります。これについては、また最後に少しお話ししたいと思います。

2番目「その後のこと」です。いわゆる原爆後障害を指しますが、そればかりではなく、それに起因する健康不安、社会的な差別等々もそこには含まれます。その実態

を、これまでご紹介した新聞各紙の調査結果を援用しながら、ご説明いたします。

ここで改めて、繰り返すまでもありませんが、原子爆弾は通常兵器と決定的に異なります。その最大の理由は、晩発性の放射線障害にあります。いわゆる原爆後障害と言われるものです。原爆放射線に起因するさまざまな身体障害の発生リスクを高めます。これをまとめたものが、次のスライドです。

### 原爆による身体障害

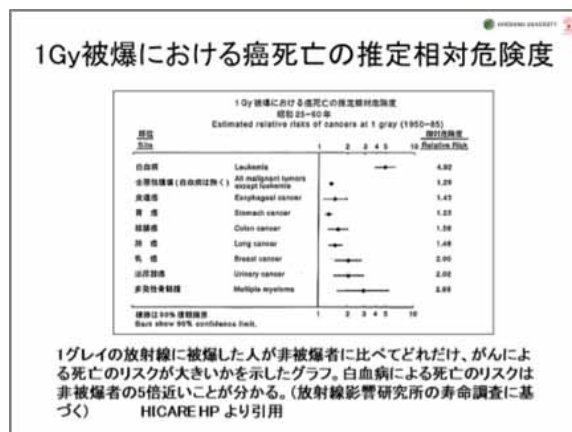
後障害: 昭和21年から現在まで

- ケロイド (昭和21-22年頃)
- 白内障 (眼の水晶体が混濁する)
- 小頭症 (知能発育遅延)・・・妊娠8-15週令に胎内被ばくした子供に発生
- 幼少期の成長発育障害
- 副甲状腺異常・甲状腺異常
- 体細胞突然変異
- 染色体異常
- 悪性腫瘍(白血病など)
  - 白血病は2-3年後から増加し、6-7年をピークに以後減少
  - 現在でもなお非被爆者より発生率が高い
  - その後、10年から30年遅れて、甲状腺がん、乳がん、肺がん、胃がん、大腸がん、多発性骨髄腫などが増加
- 被爆者の子供に対する遺伝的影響: 現在までのところ明らかなものはない

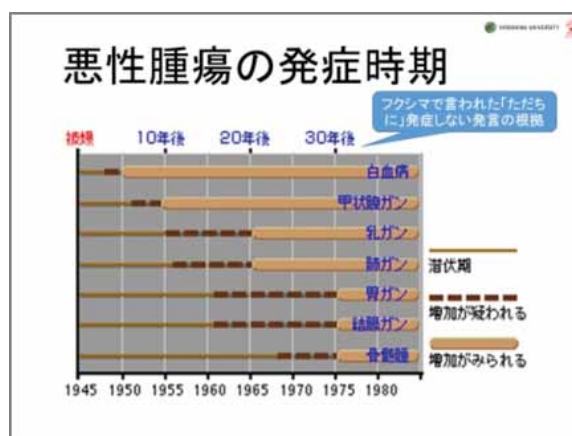
\*原田博徳東京薬科大学教授提供

このスライドに示すように、ケロイド、原爆白内障などを引き起こすばかりではなく、小頭症のリスクも高めます。小頭症の場合、妊娠8週から15週令でその発症リスクが高くなっています。それ以外にも染色体異常とか、白血病、固形がんのリスクを高めます。

次のスライドは、1グレイ被爆した場合のがん死亡の相対危険度を示したものです。ここにあるように、例えば1グレイの被爆により白血病による死亡リスクが4.92になるということです。その他の固形がんについても、次のスライド12が示すように、高いリスクが生じます。

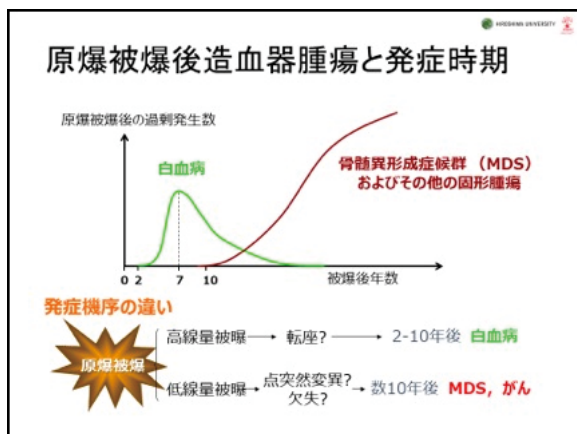


次のスライドは、原爆被爆者の悪性腫瘍の発症時期を示したものです。

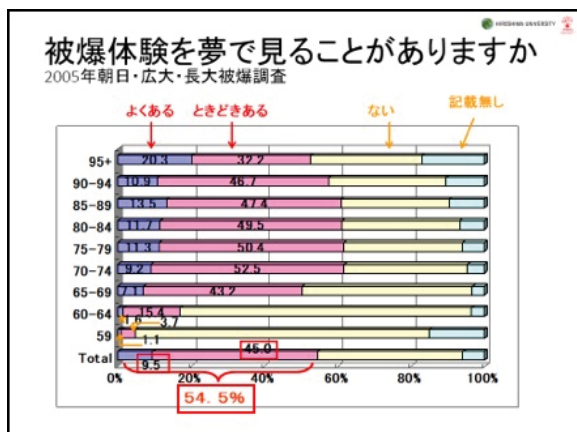


次のスライドは、原爆被爆後造血器腫瘍と発症時期を示しています。白血病の場合、被爆後6、7年後にピークを迎え、その後、発生数は減少しますが、骨髄性異形成症候群とその他の固形がんの場合は、10年後から増加傾向が認められます。こういった原爆放射線に起因する原爆後障害だけではなく、原爆体験に起因する、あるいはそれを背景とする、さまざまな心的な影響が原爆被爆者には現れます。これまでのアンケート調査からそれらを確認したいと思います。

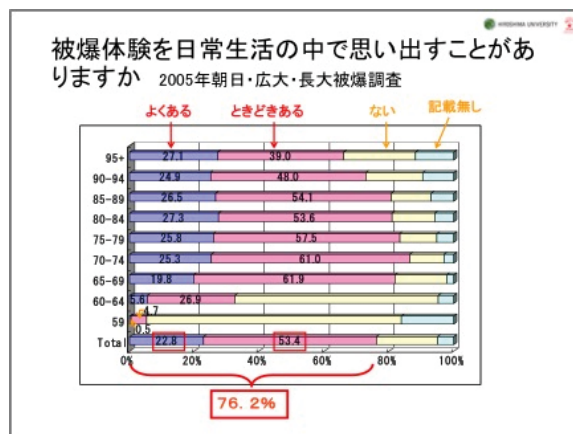




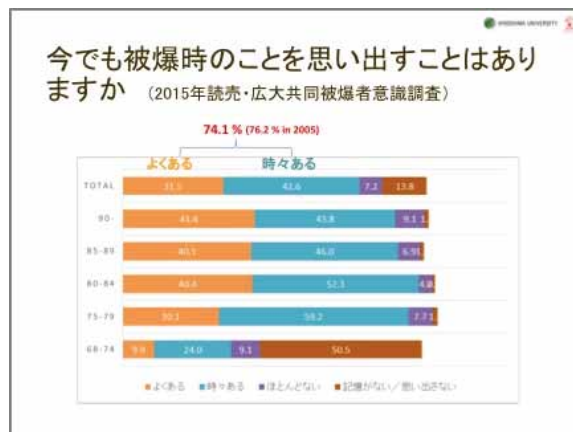
次のスライドは、少し古いデータですが、朝日新聞が2005年に実施した調査結果です。「被爆体験を夢で見ることがあるのか」という設問に対する回答結果で、約半数が「ある」と回答しています。



次のスライドは、同調査中の「被爆体験を日常生活の中で思い出すことがありますか」という設問に対する回答結果です。4分の3が「そうだ」と回答しています。



次のスライドは、2015年読売新聞の被爆者意識調査の結果です。「今でも被爆時のことを思い出すことはありますか」という設問に対して、74%が「よくある」、あるいは「時々ある」と回答しています。



証言を確認すると、被爆体験を思い出させるものとして、「フラッシュ」、「祭りの人波」、「スマトラ島沖の津波」、「焼いたスルメ」あるいは「キュウリの輪切り」を記載する人が多くみられました。ご承知のように、当時、高度な熱傷に被災した人たちに施す医薬品はほとんどありませんでした。これも少し話が横道に逸れてしまいますが、1945年8月6日原爆投下後に、広島市内の医師は多くが命を失う、あるいは診療活動ができる状況ではありませんでした。そういった状況もあり、決

定的な医師不足、医薬品不足でした。少しでも水分を含むような野菜を体に貼って熱を冷ましていたという証言があります。キュウリの輪切りをみるとあの時の記憶が蘇るのでしょう。「焼いたスルメ」の匂いは、当時の死体が焼けたにおいを想起させるといった証言がありました。

被爆者は、何を夢に見て、何を思い出すのかということですが、多くの被爆者が、ケロイドの熱気、異臭、うめき声、水を求める声、さまざまな生き地獄を思い出しています。あの日のそういった情景を夢に見て、思い出すのでしょう。

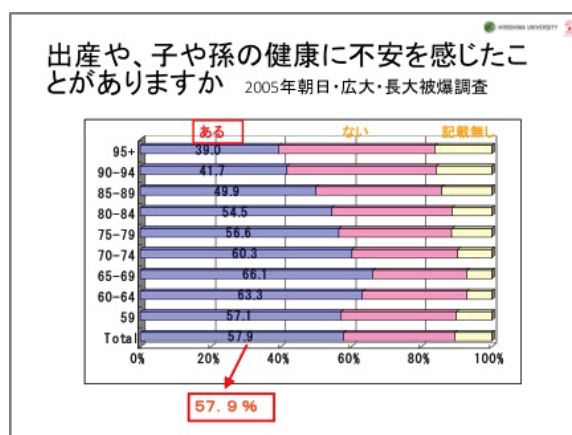
被爆による健康不安も「その後」の被爆被害の特徴の一つです。次のスライドは、2005年調査の結果です。90%以上が「健康不安を感じる」という回答をしております。

**健康不安に関する性別、被爆区分別回答結果** 2005年朝日・広大・長大被爆調査

|      | いつも不安を感じる |        | ときどき感じる |        | 感じない   |       | 総数   |      |
|------|-----------|--------|---------|--------|--------|-------|------|------|
|      | 男         | 女      | 男       | 女      | 男      | 女     | 男    | 女    |
| 直接被爆 | 1426      | 1513   | 1415    | 1074   | 205    | 106   | 3046 | 2693 |
|      | 46.82%    | 56.18% | 46.45%  | 39.88% | 6.73%  | 3.94% |      |      |
| 入市被爆 | 594       | 626    | 748     | 656    | 106    | 70    | 1448 | 1352 |
|      | 41.02%    | 46.30% | 51.66%  | 48.52% | 7.32%  | 5.18% |      |      |
| 救援活動 | 148       | 247    | 161     | 271    | 21     | 30    | 330  | 548  |
|      | 44.85%    | 45.07% | 48.79%  | 49.45% | 6.36%  | 5.47% |      |      |
| 胎内被爆 | 9         | 22     | 27      | 43     | 6      | 7     | 42   | 72   |
|      | 21.43%    | 30.56% | 64.29%  | 59.72% | 14.29% | 9.72% |      |      |
| 健診   | 140       | 162    | 139     | 174    | 17     | 19    | 296  | 355  |
|      | 47.30%    | 45.83% | 46.96%  | 49.01% | 5.74%  | 5.35% |      |      |
| 合計   | 2308      | 2548   | 2463    | 2175   | 349    | 225   | 5120 | 4948 |
|      | 45.08%    | 51.50% | 48.11%  | 43.96% | 6.82%  | 4.55% |      |      |

90%以上が健康不安を感じる

自身の健康不安ばかりではなく、出産あるいは子や孫の健康に不安を感じている被爆者も少なからずいます。このアンケート設問に対しても、58%が「感じたことがある」と回答しております。



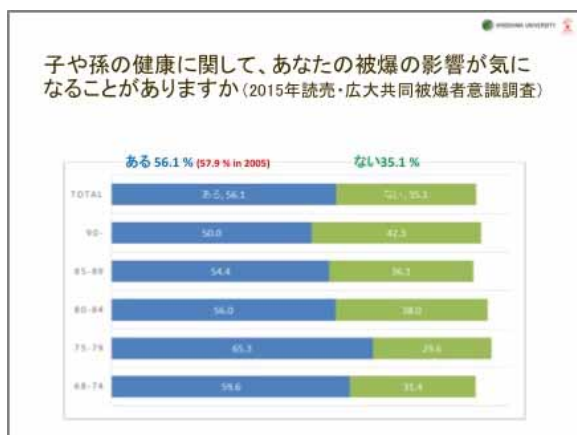
次のスライドは、出産、子・孫の健康に不安を感じたことがある人の特徴についてのスライドです。少し難しい話ですが、出産、子・孫の健康に不安を感じたことがある人の特徴をオッズ比で示したものです。結果だけお話しします。「結婚時の差別」を挙げる人が非常に多い結果でした。これは両者において、高い相関が示されています。出産、子・孫の健康に不安を感じたことがある人は、結婚時の差別を受けた人と言っても過言ではないという結果です。

- 出産、子・孫の健康に不安を感じたことがある人の特徴**
- 女性 (0.78)
  - 70歳未満 (0.68)
  - 直爆 (1.68)
  - 原爆で家族死亡、特に母親 (1.29)
  - 急性症状の発現があった (1.85)
  - 被爆が原因と思われる病気にかかったことがある (1.93)
  - 就職時の差別 (2.12)
  - **結婚時の差別 (6.96)**
  - 話し相手あり (1.17)

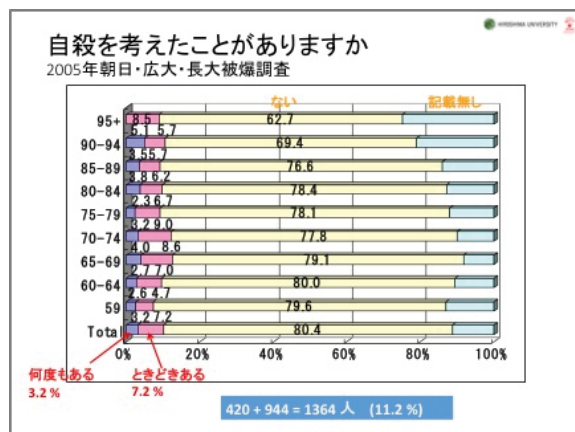
次のスライドは、2015年の調査結果ですが、「自身の被爆の影響で、子や孫の健康に不安を感じたことがあるのか」という問いに対して、約半数が「はい」と回答しています。



次のスライドもこれも同様の調査結果ですが、やはり「ある」が56%と高い値を示しています。



次のスライドは、「自殺を考えたことがありますか」という設問に対する回答結果です。なかなかこういったデータを目にすることはないので、2005年の調査では1,364名が「考えたことがある」と回答しています。これは全回答者の約11%に該当します。

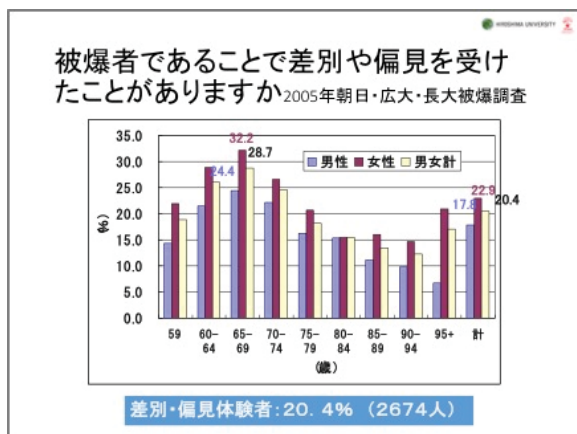


次のスライドは、そう考えた人の特徴を示しています。「進学時の差別」、「就職時の差別」、「結婚時の差別」が顕著な特徴だと言えます。同時に、このことが、自殺を考えた背景にあるとも指摘できます。

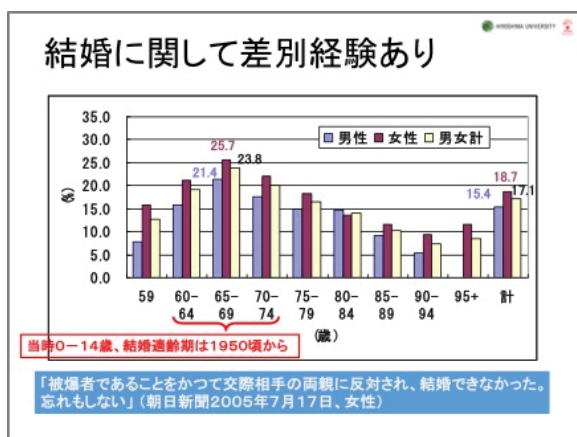
### 自殺を考えたことがある人の特徴

- 女性 (0.71)
- 70歳未満 (0.81)
- 原爆で家族死亡(配偶者) (1.59)
- 急性症状の発現があった (1.81)
- 被爆が原因と思われる病気にかかったことがある (1.65)
- 進学時の差別 (2.52)
- 就職時の差別 (3.42)
- 結婚時の差別 (2.68)
- 話し相手がない (0.41)

「被爆者であることで差別や偏見を受けたことがありますか」という問いに対する回答結果を示したものが次のスライドです。全体で20%が差別・偏見を受けたことがあると回答しています。その内訳をみると、差別・偏見経験者2674名の内、73.5%にあたる1966名が結婚時の差別を指摘しています。



次のスライドは、結婚に関して差別経験ありとする回答者の年齢構成を見たものです。世代としては60歳から74歳までの方々が非常に多いのです。こういった人たちは、当時0歳から14歳で、結婚適齢期は1950年ぐらいからだろうと考えられます。1950年代という年代を考えると、ご承知のようにいわゆる「空白の10年」、そしてその後ということになります。彼らは、そういう時代に結婚適齢期を迎えるわけです。



占領期が終わり1952年に初めて、いわゆる「原爆報道」が解禁されます。1952年には『アサヒグラフ』が初めて原爆被害を伝える写真を出します。これが非常に大反響でした。最初カラーで作っていたのですが、カラーでは追いつかずに最後は白黒で販売

しています。50万部の大反響でした。この『アサヒグラフ』が非常に売れたことによって、それまで、言うなれば広島・長崎に封印されていた原爆体験・原爆被害が周知されるわけです。このことによって、かえって結婚に対する差別を助長してしまうことになったのではないのでしょうか。

1954年には、ビキニ被爆（第五福竜丸）によって、無線長久保山愛吉氏が被爆後半年後に死亡(約5Sv.の被爆)されます。このことと先に挙げた『アサヒグラフ』によって、原爆、放射線の恐怖が国民に理解されることとなります。広島・長崎の被爆体験が国民的体験へと変遷を遂げるわけです。結婚適齢期を迎えた被爆者達は、返って注視される存在となり、結婚差別を助長した可能性があると考えています。

また、差別・偏見を受けていないと回答した72%の解釈ですが、さまざまなケースがあると思います。そのケースの一例ですが、差別・偏見を受けたくないということで被爆者であることを隠して生きてきた人も少なくありません。「この世の生き地獄を見てきた私は、東京で勤めを続けましたが、娘が二人結婚するまでは、被爆したことを一度も人に話したことはありませんでした」。これは長崎の被爆者の証言抜粋ですが、差別を受けたことがないと答えた人の中には、自分や家族を守るために被爆者であることを隠して生きてきた人も少なからずいると思います。

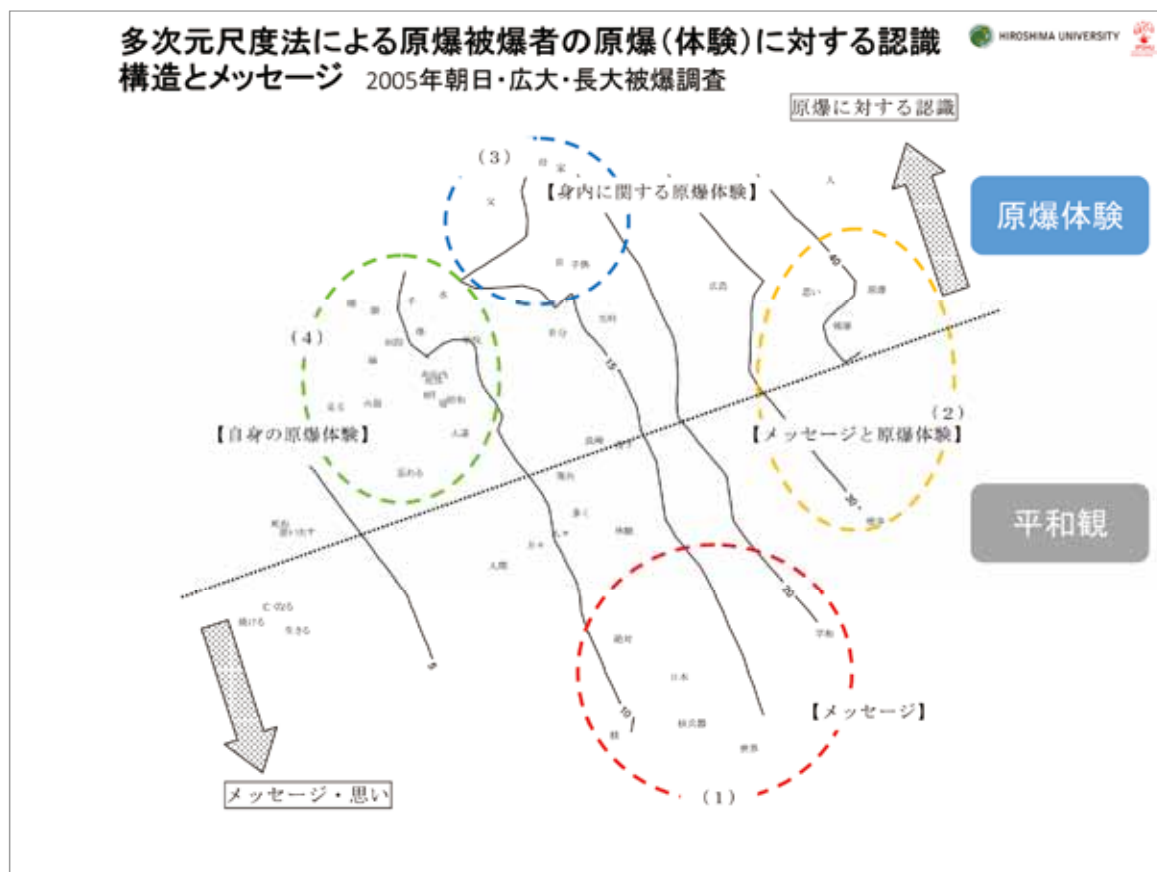
次のスライドは、2015年の読売・広島大学共同被爆者意識調査の結果ですが、「差別・偏見を受けたことがあるのか」という問いに対して、「過去にあった」が28%、「現在もある」が4.5%となっています。



い・願いまで入れて、原爆体験だというふう  
に考えています。

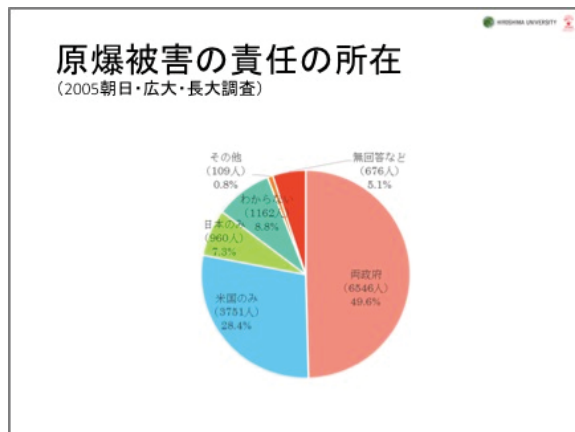
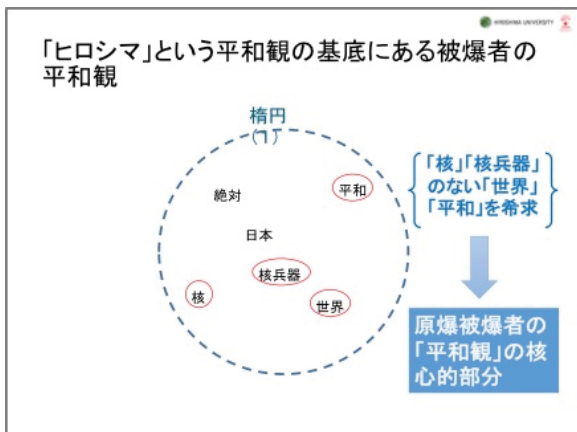
この思いと願いですが、大きく分けて二つ  
あると思っています。一つ目は、やはり「核  
なき世界」、「反戦」への強い思い・願いです。  
次のスライドは、2005年朝日新聞が1万3,000  
人を対象にアンケート調査を実施し、収集し  
た証言約6,700件を多次元尺度法によって解析  
したものです。あまり詳しく述べませんが、  
原爆被爆者の原爆（体験）に対する認識構造  
とメッセージを表したものとご理解くださ  
い。

最後に3番目の「原爆被爆者の思い・願い」  
についてお話しいたします。私は、この思



体験に対する認識構造は、原爆体験と平和観  
という二つに分けられます。本日は、平和観  
の部分だけご紹介します。平和観の部分だけ  
拡大したものが次のスライドです。被爆者の  
平和観の核的部分が、「核」・「核兵器」の

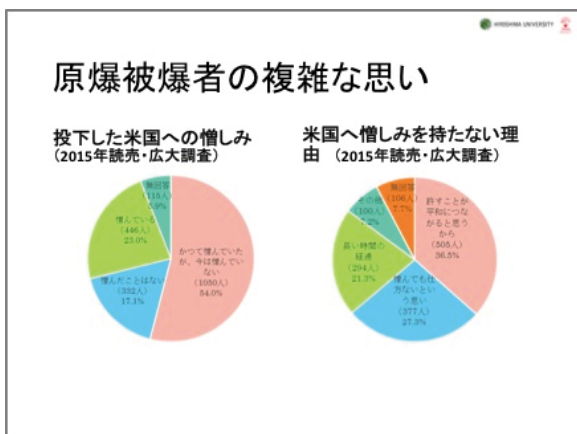
ない「世界」であることを示しています。言  
葉を換えれば、こういった思いがとても強い  
ということが指摘できます。



実はそればかりではなく、当然、投下に対する恨み、つらみとか、あるいは原爆投下の責任論、こういった感情もあります。

次のスライドは、投下した米国への憎しみ、そして憎しみを持たない理由を聞いた結果です。「かつて憎んでいたが今は憎んでいない」が54%、「憎んでいる」が23%あります。これは非難されることではありません。憎しみを持たない理由としては、「許すことが平和につながるから」との回答が最も多く、36.5%でした。

このように、原爆被爆者は、恨み、投下の責任といった感情と共存しながらも、「核なき世界」という理想を掲げ、世界平和を標榜し続けます。ある意味、複雑な原爆被爆者の思いというのが、ここにあるのではないかと思います。「核なき世界」への強い思いがあり、「世界平和」実現への熱望があります。絶対非戦もあります。同時に恨みもあるでしょう。それを乗り越え、あるいは共存するといってもいいかもしれませんが、複雑な感情がありながらも、それでもなおかつ、被爆者は、「世界平和」、「核なき世界」を標榜しています。われわれは、こういった「原爆体験」もしっかり理解する必要があるのではないかと、原爆・被爆の研究をする一人の研究者としていつも思っております。



次のスライドは、原爆被害の責任論に関して聞いた結果です。「両政府」とするものが約半数。「米国のみ」とするものが約4分の1という結果です。「日本のみ」とするものも7.3%でした。

さて、次のスライドは、72年前と現在の八丁堀付近を比べた写真です。「あの日のこと」、そして「その後のこと」、原爆放射線に起因するさまざまな疾患、原爆体験に起因する心的影響・社会的影響、この72年間すべてを原爆体験だとわれわれは理解すべきだと思います。同時に、「あの日」以降、被爆者が積極的に展開した平和運動によって構築してきた「核なき世界」への思い、

そこに至るまでのプロセスを、しっかり理解しなければいけません。それらを全部ひ

っくくめて原爆体験というふうに私は認識しています。



## 72年前の広島と現在の広島




被爆後の八丁堀通り(相生通り)。福屋前から西を見る。爆心地から約750m。  
1945年11月23日撮影。AFIP返還資料

最後に広島大学の取り組みについて、ご紹介します。広島大学は平成23年度より平和科目を設け、全学選択必修化しております。次の表は平成29年度開講の29科目です。

このうち多く科目が何らかの形で原爆にかかわる講義を盛り込んでいます。私も「ヒロシマ発平和学」という平和科目を担当しています。その講義内容を次に示しますが、「原爆被ばく」をテーマに講義を作っています。

| ■東広島キャンパス |       |     |       | 授業科目名  |
|-----------|-------|-----|-------|--|
| 学期区分      | 開講期   | 曜日  | 時限    |  |
| 前期        | 2ターム  | 月   | 1-4   | 平和を考える<br>平和と人間A-環境と生物の未来へ<br>平和と人間B-グローバル化とジェンダー視点<br>ヒロシマ学<br>環境と平和<br>国際政治と地球環境から見る平和<br>平和と芸術<br>戦争と平和に関する学際的考察<br>放射線と自然科学<br>Global Issues Towards Peace A                                 |
|           |       |     |       | 広島と平和<br>平和と人間B-人間と文化の未来へ<br>原爆体験と表象/文学<br>グローバル・パートナーシップ学<br>気候・貧困・環境問題からみた平和学<br>核時代の科学と社会<br>国際紛争論-人間の視点から-<br>暴力の比較宗教学<br>安全な社会環境の構築をめざして<br>ひろしま平和共生リーダー養成<br>Global Issues Towards Peace B |
|           | 3ターム  | 水   | 5-8   | * 戦争と平和に関する学的研究【教】   |
|           |       |     |       | 広島の歴史と国際社会   |
| 4ターム      | 金     | 5-8 | 国際関係論 |  |
| ■霞キャンパス   |       |     |       | 授業科目名  |
| 学期区分      | 開講期   | 曜日  | 時限    |  |
| 前期        | 2ターム  | 木   | 5-8   | 平和と人間C-広島で学ぶ(原爆とは何だったか)-<br>医学からみた戦争と平和<br>霞キャンパスからの平和発信   |
| ■東千田キャンパス |       |     |       | 授業科目名  |
| 学期区分      | 開講期   | 曜日  | 時限    |  |
| 前期        | セメスター | 月   | 11-12 | 平和と人間D-広島から未来に向けて-<br>ヒロシマ発平和学   |

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 原爆被害の概要(1)
- 第3回 原爆被害の概要(2)
- 第4回 ある被爆体験
- 第5回 広島大学と原爆、そして復興
- 第6回 原爆被爆者と白血病・骨髄性異形性症候群
- 第7回 東日本大震災そしてフクシマ
- 第8回 フクシマを考える
- 第9回 フクシマを考える
- 第10回 特別講義: 環境と平和: アラル海における環境破壊
- 第11回 カザフスタン共和国セミパラチンスク地区の核被害
- 第12回 モニュメント見学実習レポートについての議論
- 第13回 チェルノブイリ原発事故、そしてフクシマ
- 第14回 特別講演: 私の平和学
- 第15回 授業のまとめ: ふたたび、「平和」と何か

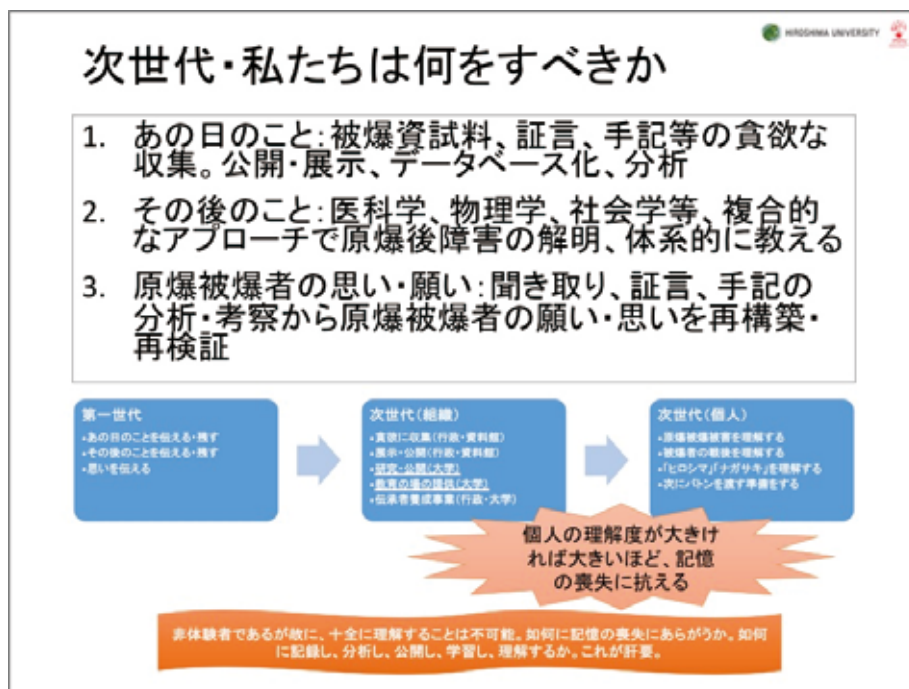
「ヒロシマ発平和学」講義内容

表平成29年度開講平和科目

本日お話しした「あの日のこと」、「その後のこと」、そして「原爆被爆者の思い・願い」を意識し、講義を組み立てています。教育に携わる私たちとしては、学生諸君に、こういった教育の場を提供し、原爆被爆被

害、被爆体験に関する知識・理解を深めていってほしいと願っています。

さて、今日のお話をまとめたものが次のスライドです。



第一世代というのは、あの日のこと、その後のことを伝え、残していただく。次世代は、組織的に貪欲にそれを収集し、整理し、展示・公開をしていく。研究という立場では、貪欲に原爆被爆被害を研究し、その成果を教育の場に還元する。ここに書いた「次世代」、これはここにいらっしゃる皆さんです。ここに集う学生諸君です。原爆被爆被害を理解し、被爆者の戦後を理解する。「ヒロシマ」、「ナガサキ」という思想・思考を理解する。そして、次にバトンを渡す。われわれは、当事者ではありません。当然いろいろなものを失うわけです。しかし、失いながらも、個人の理解度が大きければ大きいほど、その記憶の喪失に抗えるのだらうと私は信じています。

最後に、1995年の平岡敬市長の「平和宣言」の一部をここに紹介します。

「記憶は過去と未来の接点である。歴史の教訓を謙虚に学び、次代を担う若い世代に原爆や戦争の悲惨さを語り継いでいくとともに、平和の基礎となる人間教育に力を傾けたい。生命と人権が何よりも大切にされる社会にこそ、若い世代は限らない希望を抱くであろう」。

この宣言をしっかりと胸に刻み、今後の教育・研究活動を行うことをお約束して、私の話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。